

養神 : 雑録

著者	小原, 之正
雑誌名	龍南會雜誌
巻	2 9
ページ	4 1 - 4 7
発行年	1894-10-01
その他の言語のタイトル	養神 : 雑録
URL	http://hdl.handle.net/2298/4436

四顧蒼茫として一羽の鳥なく、一艘の舟なく、嶋嶼の以て目を樂まざるを、濤聲の以て耳を驚かすとき、天は拭ふが如く、海は鏡の如く、水天髣髴の際を航する大洋の旅客は、其無聊云はん方な

養 神

小 原 之 正

而 シ テ (7) ト (8) ノ 和 ハ

$$1 - \frac{1}{7} + \frac{1}{9} - \frac{1}{15} + \dots = 6S_1$$

$$= \frac{1}{2} \left(\frac{\pi}{2\sqrt{2}} + \frac{\pi}{4} \right) = \frac{(2+\sqrt{2})\pi}{8\sqrt{2}} \quad (9)$$

又 タ (7) ト (8) ノ 差 ハ

$$\frac{1}{3} - \frac{1}{5} + \frac{1}{11} - \frac{1}{13} + \dots = 2S_2$$

$$= \frac{1}{2} \left(\frac{\pi}{2\sqrt{2}} - \frac{\pi}{4} \right) = \frac{(2-\sqrt{2})\pi}{8\sqrt{2}} \quad (10)$$

次 = (9) ト (10) ノ 差 ハ

$$6S_1 - 2S_2 = \frac{(2+\sqrt{2})\pi}{8\sqrt{2}} - \frac{(2-\sqrt{2})\pi}{8\sqrt{2}} \quad (11)$$

$$\text{故} = \frac{1}{8} (S_1 - S_2) = \frac{1}{8} \left\{ \frac{(2+\sqrt{2})\pi}{48\sqrt{2}} - \frac{(2-\sqrt{2})\pi}{16\sqrt{2}} \right\} =$$

$$\frac{1}{8} \left\{ \frac{(\sqrt{2}-1)\pi}{12\sqrt{2}} \right\} = \frac{(\sqrt{2}-1)\pi}{96\sqrt{2}} \quad (12)$$

終 = (12) ノ 分子分母 = $\sqrt{2}+1$ ナ 乘ズレバ 求ムル 所ノ

$$\frac{\pi}{96(2+\sqrt{2})} \quad \text{ヲ 得ベシ}$$

く、精神爲に屈託し、萎靡すると其幾何なるやを知らず。實に此時に於ては、一羽の鳥も、一團の雲も、
嶋も、舟も、恐ろしき怒濤の哮りも、苟も其一樣無味ある厭倦を破ふるものは、天の與ふる甘露の如
く、爲に氣を鼓し、意を轉じ、心を移し、元氣再び熾んに何時しか其旅愁を忘却するものなり。夫れ陸
行に於ては、山あり、谷あり、野あり、川あり、家あり、人あり、水は潺湲として流れ、鳥は喧囂とて歌
ひ、風吹て樹木鳴り、花開て蛺蝶舞ふ。殊に日々に接する人事の變化のあるあつて、歩、一步を進むれ
ば、乃ち一つの新國より他の新國に入る心地するものなり。抑も吾人が行路は如何、陸ある乎、海ある
乎、花笑ふ地ある乎、鳥歌ふ境ある乎、將た心情を怡ばしむるものある乎、抑も悲ましむるものある
乎、變化果して多き乎、變化果して少き乎。云ふ迄もなし、吾人が行路は碧茫々たる學海あり。されば
大洋の航客と等しく、彼の一様無味ある厭倦の境を行かざるべからざる。厭倦の境を行く精神の萎
靡、屈託、消磨は得て免かるべからざるなり。殊に専門の學を修むるに至れば尙ほ然らざるを得ざる
なり。勿論自ら好んで之を究むれば、其中には快味の津々たるものあらむ。さをも人其變化なき一
事物のみよて、神を養ひ得るものに非ざるなり。若るの一事物に併吞せらるゝに至らん、精神屈
託し、短縮し、萎靡乏、倦憊し、消磨し、終には身を擧げて、その事物のために支配せらるゝに到るもの
なり。彼の絶世の奇才を抱き、學成り業遂げ、社會に於ける地歩漸く占め來り、將に大に其志を展んど
する一刹那に於て、俄然力盡き、精損じて斃るゝ英物は、之が爲に非ざるあきを知んや。果して然ら
ば、吾人は常に神を養ひ、心廣く、臍脾かに、氣平かに、勇氣勃々、活氣潑々、一番は以て、一番の精氣を
養はざるべからざるなり、然らば神を養ふ如何にして可あらん、曰く天然の靈氣に浴するにあり。

世波に驅れて悲痛の淵に沈める幾多の人は、何物に向つて絶叫する乎。滿腔の希望一たび蹉跌して、

無限の怨を懷けるものは、果して何物に向つて愁訴する乎。嗚呼是れ皆天然に向つて之を訴ふるに非ずや。彼の人生の無常を悟りて、死は生に優ると思ひ西行をして、尙ほ生を保たしめしは、之ありまが爲には非ざる歟。五斗米の爲に腰を屈するに忍びず、脱然として世を逃れし淵明が、この餘年を嬉々洋々の中に送りしは、之ありしが爲には非ざる歟。二姓に仕へずとて、飄然去て山中に薇を採りし宋末の眞山民が、忿恨の中にも尙ほの心を慰めしは、之ありしが爲には非ざる歟。果て之ありしが爲ありとせば、天然の人に於ける靈力亦大からず哉。嗚呼天然の靈力は此等悲絶慘絶の境に沈める人々をして、尙能く心廣く、牀胖かに、氣平からまむ。況んや吾人に於てをや。天然何を以て然るや、天然は恒久あり、至誠なり、多情あり、素朴なり、雄大あり、高傑あり。天然は一たび交りて萬古交を移さざるあり。天然は距離の遠近、對面の多少によりて交を變せざるあり。天然は幸不幸に拘らず、榮辱に係らず、貧富に係らず、順逆に係らず、常に我側に在り、常に我心を解して同情同感を與ふるものあり。こゝを以て之に交る愈久して愈親しむべし。愈親しければ即天然の靈氣に浴するに至る。浴するとは已も亦高傑、雄大、素朴、多情、至誠、恒久ある、森羅萬象中に包容囊括せられて、共に一牀とあることあり。さらば如何にして天然の靈氣に浴すべき。

第一散策。 早曉結裝、門を出づれば晨星點々數へつべし。四方の諸山は煙霧に罩められて、未だ眠より覺る如く、萬籟寂々として、惟だ時に耳朶を打つは、曉を報する鷄の聲、遠く吠る犬の聲のみなり。曉風冷かに吹て、葛衣輕き、こゝに於て意輕快、氣清爽、覺へず快哉と叫び行く少時、曙光漸く來りて、諸山は拭ふが如く孱顔を顯え、炊烟深き處に山村を認め、野水縱横したる處に水郭長堤を見る。山に登らん乎。樹木森々として禽鳥長へに囀り、伐木丁々として聲幽かに響き、溪深ふして水聲遙に潺

浚たり。時に見る、柴刈る乙女、薪を負ふ樵夫、ア、如何に美妙なる。こゝに於て、獨り吟して共に和することなきを痛む莫れ、「風篋也解作吟聲」あり。うれ愈登りて愈高く、伐木の響來らず、「一鳥不鳴山更幽」の境に入り「只與白雲相送迎」に至つては、名魂利魄盡く銷磨し去りて、一身亦塵界のものにあらず。若し夫れ、月夜舟に掉すが如きは、其快亦甚しからむ。暮色漸く到るかと見れば、東山漸く白く。微風徐ろに來をば、漣々たる金波銀波の中に、大魚小魚潑潑として躍り。水烟立かと見れば「月光如水々連天」の情趣あり。更一更、擾より寂に入り、寂より幽に入り、夜漸く闌にして、月天心に到るときは、四隣沈として天地も眠かと疑はれ所謂「月到天心處、風來水面時、一般清涼意、料得少人知。」嗚呼この境に入る、我は已に本然の我を離れて、天然の靈氣に浴したるものあり。ア、此一剎那、已れ我を跳脱し去る、至誠と云はんか、素朴と云はんか、將た雄大と云はんか、聖人、菩薩、乃至天使、神明、嗚呼豈に遠からんや。

されど、天然の靈氣に浴する、豈遠く山に登り、水に浮ぶのみからんや。吾人が常に散步する、學校の四近にても可あり、龍峯白渾にても可なり、一日の中氣象千萬あるは、洞庭湖畔の岳陽樓のみにあらざるあり。風雨晴陰到る時、龍峰白渾亦氣象千萬たるなり。否、「精細の眼より見る時には、同一の野原に遊ぶも、前にも後にも見ざる新き風光を刻々に見出すあり」。どのエマルソン氏の言をして眞からしめば、見る人の心と眼の如何によりては、何處たりとも、氣象千萬たるを得るなり。試に學校の四近に遊ばんか、田を耕す農夫、馬を曳く村兒、父母が耕耘する傍に遊ぶ小供、田畝に團樂して食する家族、さては明日の天氣を候して佇立する村翁。何ぞろを美なる、何ぞろれ優ある。龍峰に登んか、爲朝の城跡は遠く南面にあり。清正の植られし八町馬場のお杉は、畫湖の碧は一層の色を與へて近く眼下

にあり。銀香城は西にありて、營中の兵士が吹く喇叭の聲、風のまに／＼耳を打ち。蘇岳は突屹東に聳へて、烟煙天に棚曳けり。白渾に行んか、權現の松樹婆娑たる所、白頭の老翁釣を垂るゝ邊、加何に幽妙ある。うれ心をどめて見る、何物か天然の靈氣を有せざるものあらむ。一本一石一花一草の微と雖ども、苟も默思潛念すれば、其中には、云ふに云はれざる妙味を含めるものあり。彼の『無名の野花さへも、涙に餘る程の深念を與ふるものあり』とは、この中の消息を道破したる、シャルツタルスの警語にあらずや。この涙に餘る程の深念を會するに至れば、面上三斗の塵、忽然として消失するあり、胸中一片の靈火、勃然として燃來るなり。

第二繪畫。天然を其儘に、否、天然を美の眼より寫し出したるは繪畫あり。されば、繪畫の趣を探り、致を釣り、之を心に會するに至りては、適切に且容易に、天然の靈氣に浴するを得るなり。試に畫帖を取りて一見せよ。素冠を戴きたる一高峯巍峨として半空にあり、月白ふして秋氣蕭殺。たり、忽ち見る、鐵衣の偉人、虬髯颯爽として笙を吹く、これ新羅三郎義光が、足柄山に笙を吹く圖にあらずや、何ぞ雅趣多き。月朦朧として影暗き所、内に錦袍の一人、竊かに門扉を開き、外に馬を下れる鐵衣の士、鎧袖より一巻の書を出し悄然としてぞめるものあり。これ平族没落の際、忠度が馬を反して、無限の胸奥を其師に訴へ、歌集を贈る圖にあらずや。何ぞ幽婉悽愴たる。過雁數行天、半に横り、月明にして白晝の如く、四顧蒼茫として眼界轉た濶大、繡衣の入道、大杯を捧げ、將士を顧て洪然として笑ふ。これ猛將上杉能州の夜宴あるか。何ぞ豪々、蕩々として、其氣象の嵒嶮たる。白沙青松相連り、白鳥碧水に映じて轉た明白あるは、天の橋立あるか。嶋嶼點々として浮ぶが如く、白帆翩々として舞ふが如きは、松嶋あるか。枯枝に鳥のとまるは、晚秋の景。梅枝に鶯の囀づるは、初春の景。湖上の扁舟は、世を

厭ふ隱者。山中の茅屋は、雲を慕ふ逸士。花を浮べて流るゝ水。浮べる花を趁へる蝶、見來れば、身は飄々として、黃鶴は乗じ白雲に入る。嗚呼この時よ於て、復た何の偽善あらむ、復た何の虚飾あらむ、復た何の利慾あらむ、復た何の邪念あらむ。

第三詩歌。古人曰く、『畫は無聲の詩にして、詩は有聲の畫なり』と。されば繪畫に於て、天然の靈氣に浴し得るとせば、詩歌に於ても亦同じからざるべからず。誰かエキセルショゝを誦して、腕を扼して蹶起せざるものある。誰かグレーが墓上感慨の詩を吟じて、潸然として悲し、戰然として悸かざるものある。

とんばつり今日は何處まで行たやら。

一誦涙襟を濡す。誰か涙を身に害ありと云ふ、這般の涙滴實は甘露も、蜜も、蜜も、蜜も。

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出で月かも。

萬里の他郷に、故山を思ふてやまず、懷を月によす。何等の慘絶、何等の悲絶。

久らたの光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ。

幽寂の致、一讀の後瞑目靜想すれば、身は遠く天外に在る心地をする。

簾幕蕭々竹院深、客懷孤寂伴燈吟。無端一夜空階雨、滴碎思鄉萬里心。

月華星彩坐來収、山色江聲暗結愁。半夜燈前十年事、一時和雨到心頭。

細雨蕭々として夜寂寥、萬里は客となり、孤燈の下憂喜交々至る、嗚呼何ぞ幽趣の濃かある。

問余何意棲碧山、笑而不答心自閑。桃花流水杳然去、別有天地非人間。

好山多在眼、塵事少關心。風竹有聲画、石泉無操琴。許猿分野果、留鶴守雲林。不是閑邊客、誰

來此地吟。

逍遙自適、雲外に傲遊す、功名富貴我に於て浮雲の如し。

傷心欲問前朝事、唯見江流去不回。日暮東風春草綠、鷓鴣飛上越王臺。

興廢存亡。觀來ればこそ一轉瞬、美人英雄忽ち來り忽ち逝く。

雲淡風輕欲雨天、數村桑柘起炊煙。耕餘黃犢無人管、自上橫坡綠處眠。

雨後沙虛古岸崩、魚梁移入亂雲層。歸時月墮汀州暗、認得妻兒結網燈。

清たり淡たり、嗚呼是雲無心よして岫を出るもの。一卷の詩歌、讀み去り讀み來れば、精想湧起、忽々如として我を忘れ、何時しか身は玲瓏たる詩歌の天地に逍遙し、心清く氣高く、身の塵世にあるを忘るゝに至る。ア、天下の至樂、何ぞ去て他に求むるを要せむ。

吾人は養神に付て一言せり。されど、養神と養牀と豈に二途あらんや。神を養ふて心廣く、牀胖かに、氣平かに、勇氣勃々、精氣潑々ならしむるは、復た牀を養ふよ外ならず。如何に苦痛が牀を害するかを知らば、亦安意が如何に牀を利するかを知らむ。如何に憂愁が牀を損するかを知らば、亦快樂が如何に牀を益するかを知らむ。吾人と空言を吐くを欲せざるあり、欲せざるにあらず、忍びざるあり。斯説の如き、これ吾人が實踐上より得來りたるもの。其神を養ふに於て益あるおと、確信して疑はざる所あり。云ふ斯文をして、秋風に舞ふ落葉たらしむると勿れ。

所謂不知火

K M 生

昨年九月上旬、我中川教授が企てたる、不知火探検は、一時大評判となりて、遂に西字新聞にまで、譯